

第133回 三方限古典塾（'17, 11, 17）

呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その6）

- 1 三十年の心力を用うれども一箇の偽の字を除き得ず。或る人曰く、「君は儘めて実を尚ぶ。余曰く、「所謂偽とは、豈に必ずしも言行の間に在らんや。実心、民の為にすれども、一念我を徳とするの心を雑うれば、便ちこれ偽なり。実心、善を為せども、一念知られんことを求むるの心を雑うれば、便ちこれ偽なり。

道理上做すべきこと十分なるに、ただ一毫を争いていまだ満足せざるは、便ちこれ偽なり。義に向かうに汲たれども、纔に二三の心あるは、便ちこれ偽なり。

白昼為す所皆善にして、而も夢寐にして非癖の干すあるは、便ちこれ偽なり。心中に九分あるに、外面は做し得て恰十分なるに象たるは、便ちこれ偽なり。

これ独り覚るの偽なり。余は皆去る能わず。漸く防閑を潰して悪を言行の間に延ばさんことを恐るのみ。

（存 心）

（意識） 三十年の間、私は心力を尽くして努めたけれども、「偽」の一字を取り除くことができなかった。ある人が「君は実質を重視しすぎているのではないか」と言ったので、私は次のように答えた。「世に言う偽とは、必ずしも言葉や行動のことについてのみ言っているのではない。例えば、真心から人々のために何かをしても、ほんの一念でも感謝を期待する気持ちが混じっていれば、それは「偽」である。心から善を行っていても、それを他人に知られたいという気持ちが少しでも混じっていれば、これも「偽」である。

道理の上からいって、しなければならないことを十分したことに、いささかでも満足できない部分が残っていたのでは、これもまた「偽」である。正義に向かおうとする心があくせくと努めていても、ほんのわずかでもそれを自制する心があつたのでは、「偽」である。

昼間にすることはことごとく善であっても、寝ていて夢の中で道に背いた行為があれば、これも「偽」である。心では九割しか達成していないと思っているのに、外面はいかにも十分にしているように見せかけているのも「偽」である。

これらは他人には分からない、自分だけが気づいている「偽」である。私はこのような「偽」を除き去ることができないでいる。だから、それらがやがて勢力を拡大して、言葉や行動にも悪が蔓延してくるのではないかとおそれているのだ」と。

（余説） 呻吟語ならではの自己への厳しさです。これだけ徹底して「偽」を取り除くことは実に厳しい感じがしますが、それを自覚することが大切な気がします。九分九厘の善を行っても一厘の「利己的な心」を残さないこと、そうできるように努めたいものです。

2 忍激の二字は、これ禍福の関なり。

（存 心）

（意識） じつと堪えて辛抱するか、一時の感情に駆られて激発するか、どちらをとるかが幸運と災いの分かれ目となる。「短気」は「損気」です。

（余説） 感情に駆られることは、理性的な判断を放棄することです。結果は必ず後悔する羽目になるのは分かっているのに、つい繰り返してしまいます。それを抑制するにはふだんの修行なのでしょうが……。人格は自分で作っていくものだそうです。

（参考） 古文真宝「厚く積みて、薄く発す」（徳は腹に収めてむやみに吐き出さない）

3 豆を種^ううればその苗は必ず豆^{うり}なり。瓜を種^{うり}うればその苗は必ず瓜なり。いまだ存する所かくの如くにして、而も発^{しか}する所かくの如くならざる者あらず。

心はもと人欲^{じやきよく}にして、而も事は天理^まならんことを欲し、心はもと邪曲^よにして、而も言は正直ならんことを欲するは、それ將た能くせんや。

ここを以って君子はその存する所を慎む。存する所是なれば、種種皆是なり。存する所非なれば、種種皆非なり。いまだ分毫^{ぶんごう}も爽^{たが}う者あらず。(存 心)

(意識) 豆の種をまけば必ず豆の苗が生じ、瓜の種をまけば必ず瓜の苗が生えてくる。この世に存在するのはすべてこのように、原因があつてそれに伴う結果が生じるのであつて、例外は一つもないのである。心というものは、本来は人間の欲望の表れであるのに、それでいてやることだけは天理に合わせようとしている。心がねじ曲がつているのに、言葉は正直であろうとする。そんなことは、どだい無理な話ではないか。

だから君子は、自分の心のありように気をつけるのである。心に持つものが正しければ、やることなすこと皆正しくなり、それが間違っていれば、やることなすこと皆間違ってくる。この原則に当てはまらない者は、未だかつて一人もない。

(余説) 人間の心というのは、本来天理と人欲とがせめぎ合っている場だそうです。したがって、真つ当な人間になるためには、人欲に打ち克つだけの努力が欠かせません。

学問に専念したり、厳しい修行に耐えることもその努力一つですが、「百姓は、日々耕すその鍬^{くわ}の先から真理を紡ぎ出す」とも言われます。「己がその時為すべきことに専念する」ことも一方策でしょう。日常をないがしろにしていくら修行を積んでも、それは観念的なものに過ぎません。鎌倉時代の華嚴宗の名僧「梅尾明恵上人」の、生涯を貫いた課題は「阿留辺機夜字和」(その時・場・人のあるべき様は何か)だったそうです。

陽明学の「事上錬磨」(毎日の仕事を通じて己を磨く) ← 車輪 ← 古典・歴史に学ぶ

4 自家の好き^よ 処^{ところ}は、幾分^{えんぶ}を掩蔵^{えんざう}せよ。これはこれ涵蓄^{かんちく}にして以^{しん}って深を養う。別人の好^よからざる 処^{ところ}は、幾分^{えんぶ}を掩蔵^{えんざう}せんことを要す。これはこれ渾厚^{こんこう}にして以^{しん}って大を養う。(存 心)

(意識) 自分の長所は、なるべく覆い隠してひけらかさない。そうすれば、心の含みが広くて徳を蓄えることができる。他人の短所は、覆い隠してできるだけあばかないことが大切だ。そうすればどっしりとして、深みのある徳を養うことができる。

(余説) 完全無欠な人は存在しません。誰にも長所と短所があり、だからこそ人生の妙味もあります。自分の長所をひけらかさず、他人の短所をあばかないのは、今も昔も変わらない人間関係に対処する最も基本的な「人生作法」の一つです。

人は、他人は見ようが、自分は見えない。故に、他人は目を通じて自分を見ようが必要がある。

(参考) 弘法大師空海「人の短を言うなかれ。己の長を説くなかれ」

荻生徂徠^{おぎゅうそらい} 「人はその長所のみをとれば可なり。短所を知るを要せず」

梅尾明恵上人^{あやまち} 「人の 過^{あやまち} を云ふ程の者は、我身に徳のなきをり(場合)の事なり」

論語・顔淵^{がんえん} 「君子は人の美を成し、ひとの悪を成さず。小人はこれに反す」

ドラッカー 「他人の短所が目につきすぎる人は、経営者には向いていない」

デール・カーネギー^{ゆううつ} 「他人の短所を見れば憂鬱になり、長所を見れば人生が明るくなる」